

# 応募作品と出合うことのよろこび

公益財団法人文字・活字文化推進機構 理事長 肥田 美代子（童話作家）

世の中のできごとや人びとの考え方を、「文字」で記録して後世に伝えられるようになったとき、「有史時代」が始まったのでした。文字がなければ、本も新聞も法律も国もなく、文明そのものが存続しなかったでありましょう。

文字・活字文化推進機構賞に選ばれた兵庫県の甲南女子中学校と愛知県立天白高等学校のとりくみを読みながら、わたしはあらためて文字の役目がどれほど大きいものであるかについて思いを巡らせたのでした。

甲南女子中学校のとりくみのひとつ、「中1への読書案内」をとりあげてみましょう。この「読書案内」は、毎年、中学2年生全員が「自分のおすすすめ本」の紹介文を書き、冊子にまとめて、1年生に配るといふものです。「おすすすめ本」が紹介文で記録されることで、その配布をうけた生徒は、時をへても内容を正しく読みとることができます。これが口伝とのちがいです。大きくかまえていえば、人類が蓄積してきた知恵も知識も物語も、「文字」によって継承されてきたのであり、「中1への読書案内」もその一環といえます。愛知県立天白高等学校でも、やはり、入学したばかりの1年生に対し、「天白高校推薦図書」を配布し、読書の魅力を伝えていきます。それと同時にわたしが興味を持ったのは、1年生に図書館の利用の仕方を教えていることです。これは子どもたちが生涯にわたって、学びつづける方法を身につける足がかりとなりましょう。

学校図書館は、子どもたちが通いたくるところなのか、読書活動や探究学習に耐えられるのか、本の目利きはあるのか——学校図書館はその学校の精神的な肖像であり、子どもたちの心の姿勢を整えてくれます。書架にゲーテや紫式部の作品があれば手にとってページをめくってみる。わからない表現があればいくども読みかえす。この読みかえしは、ゲーテや紫式部との対話を意味しています。

図書館ではいろいろな書物を楽しむばかりでなく、図書館の歴史についても思索してみましよう。文字が生まれたメソポタミアへの旅となり、シュメール人との出会いの旅ともなるはずですが、数多く寄せられた応募作品との出合いは、今年もわたしの心のよろこびとなりました。